

参照点能力と言語現象 —「せつかく」—

Reference Point Ability and Linguistic Phenomenon

—Case Study: ‘sekkaku’—

山本雅子

YAMAMOTO Masako

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: bella@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

This paper aims to develop a new Japanese Grammar which explains the mechanism of an expression being yielded out. Referential ability is introduced as a methodological principle that has guided research in cognitive grammar. The application of this principle is exemplified by a case study, pertaining to adverb ‘sekkaku’.

1 はじめに

本稿は、日本語学習者の運用能力向上に貢献する日本語研究を目指すものである。従来の言語研究では、言語を自律した体系として捉え、辞書的知識や文法知識などに関わるステイックな知識の記述が進められてきている。そのため、言葉の研究というと、用例を列挙し、それらの用例に即して後付的な説明をするという仕方が主流となっている。しかし、こういった後付け的な作業の産物が、学習者の運用能力の向上に如何に無力であるかは、言語教育に携わっている者なら誰もが経験を通して熟知しているところである。では、学習者の運用能力をつけるにはどのような説明が必要とされるのか。それは、その形式が産出されるメカニズムの説明である。つまり、分析要因に言語主体を介入させ、意味と言語主体との関係を明らかにすることが必要なのである。

これまでの言語学では、言葉は、恣意的な記号とみなされており、それ自身では意味がな

いが、世界のうちの事物と直接に対応することによって意味を獲得すると考えられている。こういった考えのなかでは、言語主体が意味に介入する余地はない。しかし、意味とは、果たして、言語主体と関係のないところで成立しているのだろうか。否、言葉が意味を持つのは、言葉を用いて何かを意味しようとする人々にとってだけである。言葉の意味は、ある共同体がその共同体にとってあることを意味するための言葉の使用に基づいているのであり、言語主体が行う解釈の仕方を反映したものなのである。言語主体こそが意味を成立させるのであり、意味の成立は言語主体の介入なしにはあり得ない。

では如何にして言語分析に言語主体を介在させるのか。認知言語学のアプローチでは、日常言語の表現は、主体が外部世界を解釈する認知プロセスの反映として以下のように規定されている。われわれは日々具体的な経験に基づいて様々なイメージを形作りつつ、一方でその経験を抽象化・構造化した知識形態として保存し、対象の理解を促進する規範や鋳型としてはたらかせて日常生活を営んでいる。こうした種々の身体経験をもとに形成されたイメージを、より高次に抽象化・構造化し、拡張を動機づける規範となるような知識形態をイメージ・スキーマという。われわれの日常は、思考・行動のすべてが自己の持つイメージ・スキーマによって動機づけられているといっても過言ではなく、言葉の意味には、認知のプロセスにおいて機能する種々のイメージ・スキーマのはたらきが反映されている。換言すれば、言葉の意味は主体の認知能力を反映するスキーマによって動機づけられているのであり、言葉とは、言語主体の事象認知のプロセスを表出したものなのである。

このような認知言語学のアプローチを採れば、言語主体は自ずと言葉の意味に関与することになる。そこで、言語表現を言語主体との関係から捉えることを目的とする本稿では、認知言語学のパラダイムのもと、事例研究として、日本語学習者にとって運用が困難とされる副詞「せっかく」の意味機能を、人間の一般的な認知能力の一つである参照点能力の観点から考える。従来の研究方法とは全く異なり、表現の意味機能を実際の言語使用の場から立ち現れてくるスキーマとして捉え直すという新しい研究方法による説明を試みることにより、日本語教育への貢献を目指す。

II 参照点能力と言語現象

1 参照点スキーマ

われわれが対象を解釈するには、知覚を媒介として対象を直接解釈する場合と、知覚以外の何かを手掛かりにして対象を間接的に解釈する場合の二通りが考えられる。後者は、何らかの直接的もしくは間接的手掛かりを拠点にして心的経路を辿り、最終的に求める対象に到達するというもので、人間の一般的な認知能力の一つであるとされている。ラネカー (Langacker (1993)) では、この能力を参照点能力 (reference-point ability) と呼んで、そのス

キーマを図1のように規定している。図1では、Cは認知主体 (conceptualizer), Rは参照点 (reference point), Tはターゲット (target), 楕円形のサークル (D)は参照点によって限定されるターゲットの支配領域 (dominion), 破線の矢印 (-----▶)は認知主体が参照点を経由してターゲットに到達していくメンタル・コンタクト (mental contact)を示す。認知主体は、まず、参照点に意識を焦点化させ、次いでその参照点を手掛かりにしてターゲットに到達していくのである。この種の能力自体は、言語表現 (あるいは言語現象) それ自体とは区別される存在であるが、われわれはこの能力を無意識のうちに活用することにより、実に多様な言語表現を産出している。

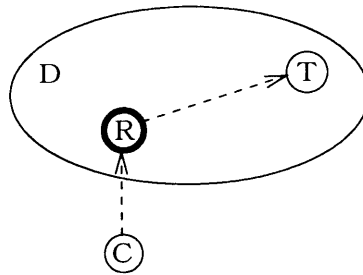


図1 (Langacker 1993 : 6)

2 照応現象と参照点能力

言語現象に参照点能力が反映されている基本的なものとしては、代名詞の照応現象が挙げられる。照応関係の理解の基本は、先行詞と代名詞の同一性の認定にあり、その認定のプロセスは参照点とターゲットの関係から図2のように図示できる。参照点は先行詞 (Ant (= antecedent)), ターゲットは代名詞 (Pro (= pronoun)) に対応し、両者を結ぶ点線は、先行詞と代名詞が同一指示関係にあることを示している。また、ドミニオン (D (= dominion)) の領域は、参照点としての先行詞によって起動されるターゲットの候補の探索領域を示している。

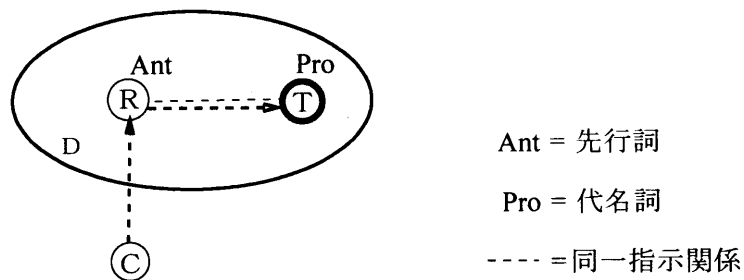


図2 (山梨 2000 : 91)

- ① 最初にミュウに会ったとき、すみれはジャック・ケロアックの小説の話をした。当時彼女はケロアックの小説世界にのめりこんでいたのだ。 (『スプートニク』)

①では、先行詞「すみれ」が参照点としてターゲット候補の探索領域を起動し、この領域のなかに後続する、先行詞と同一指示的な代名詞「彼女」のターゲットが同定される。

「一般に、文のどの要素が参照点として機能するかは、統語関係からみて、その要素が主語、直接目的語、間接目的語をはじめとする文の構成要素のどの位置にくるかによって相対的に決められる。文レベルの情報構造の観点からみるならば、基本的な語順を反映する無標のケースでは、トラジェクター¹⁾としての主語は一次的な焦点が認められる要素、ランドマークとしての直接目的語と間接目的語は、それぞれ二次的な焦点と三次的な焦点が認められる要素として規定される。」²⁾ そのため、主語であることから一次的な焦点である「すみれ」が参照点となり、「すみれ」を同一指示する代名詞である「彼女」が同定されるのである。このような代名詞に見られる同一指示による照応関係を基本とし、参照点と指示される対象との関係は言語現象にもさまざまな形で反映されている。

3 参照点能力とトピック化

代名詞に見られる同一指示機能を、同一性は焦点化せず、たんに対象を特定するという指示行為のみに拡張すると、参照点とターゲットの関係は「は」でマークされる〈全体と部分〉〈集合とメンバー〉の関係をも説明する。〈全体〉—〈部分〉、〈集合〉—〈メンバー〉の関係では、参照点としての全体 (ないしは集合) がターゲットとしての部分 (ないしはメンバー) をふくむ関係にある。〈全体と部分〉、〈集合とメンバー〉の関係は図3のように規定できる。

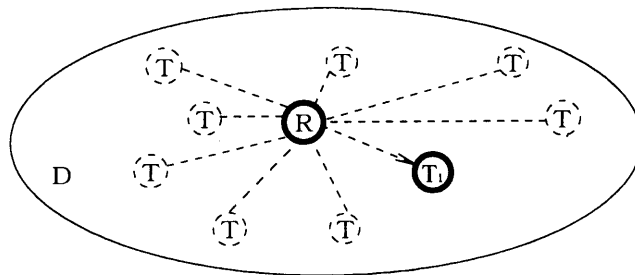


図3

1) 認知能力の観点から言語現象を捉える立場では、概念内容が同じであっても、捉え方が違えば意味が異なるが、その捉え方の違いの1つに際だちがある。際だちのもっとも大きい部分構造をトラジェクターと呼び、その他の際だちの部分ランドマークと呼ぶ。

2) 山梨 (2000:92) 参照。

図3では、〈全体〉もしくは〈集合〉を表す参照点が指示されることによって、ターゲットの候補の探索領域が起動される。この起動された領域がドミニオン (D) であり、なんらかの意味でプロファイルされている。プロファイルとは、言語主体が特に注目し、際だちの大きい部分構造を意味し、言語表現が直接指し示している部分であるとも言える。参照点とターゲットの関係は、このプロファイルされたドミニオンの参照点 (R) を手掛かりに、想定されるいくつかのターゲット (T) のうちからあるターゲット (T₁) が特定されたことを表す。このような参照点能力を表す言語事例が②③である。

② 〈全体と部分〉 ジョアンは目が印象的だ。

③ 〈集合とメンバー〉 豊橋はちくわが有名だ。

②では、ジョアンが参照点となり、ジョアンを〈全体〉としてジョアンの〈部分〉を探索する領域が起動され、領域内に存在するジョアンの身体の一部である目がターゲットとして特定されている。また、③では、豊橋という地名が参照点となり、豊橋を有名であると評価させる〈集合体〉の中から〈メンバー〉の一つであるちくわがターゲットとして特定されている。②③では、文のコンテキストから〈全体と部分〉〈集合とメンバー〉と分類されているが、参照点とターゲットという認知プロセスの観点からは全く同一に説明可能な現象である。

4 参照点能力の動性

参照点とターゲットの関係は固定されたものではなく、次に示すようにその認知プロセスは動的で相対的である。

④ カメラは書齋の机の引き出しの中にある。

④のアンダーラインは話者の心的視線の移動を表した表現である。このような視線の移動は次のように説明できる。

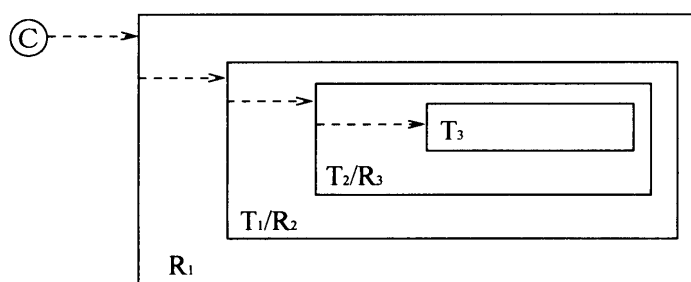


図4 (山梨2000 : 61)

④では、最初の参照点 (R₁) である「書齋」に探索過程の途上のターゲット (T₁) である「机」が埋め込まれ、このターゲットを次の参照点 (R₂) としてさらに限定された探索領域がターゲット (T₂) として絞り込まれ、さらにこのターゲットを次の参照点 (R₃) として最終的なターゲットの場所 (T₃) である「中」が特定されるというプロセスとなっている。すなわち、④は、主体が主語が指示する存在を視線を移動していくことにより探求していく過程を示しているのだが、探求過程における途中の参照点とターゲットが推移していく過程で参照点からの探索領域が次第に絞られていき、最終的なターゲットの発見にいたる³⁾というものである。

5 まとめ

参照点能力とは、概念主体がある対象を参照点とすることによって、ターゲット候補の探索領域が起動され、その探索領域の中から特定のターゲットを特定するという、人間の基本的な認知能力である。本節では、代名詞にみられる照応関係や助詞「は」を含む〈部分と全体〉〈集合とメンバー〉を表すトピック構文などで、この認知能力が如何にはたらくかを説明するとともに、参照点能力の特徴である動性、相対性について説明した。この能力は上述以外の諸々の言語活動においても偏在的に用いられているものであり、非常に汎用性の高い認知能力である。次節では、この参照点スキーマを実際に稼働させることにより、「せっかく」の意味機能の統一的説明を試みる。

III 「せっかく」の意味機能

1 従来の説明

日本語を母語とする者を対象として編まれた辞書である『広辞苑』(第5版岩波書店(1998))と、一方、おもに日本語学習者を対象とした説明書である『現代副詞用法辞典』(東京堂出版(1994))に於ける「せっかく」の項の記述内容を以下に掲げる。前者に比べ後者の方が遙かに詳しい文例と説明を載せているという相違はあるものの、どちらも後付的な説明であることから、「せっかく」の意味機能の側面を捉えているにすぎないという点においては共通しており、このような説明が日本語学習者の運用能力の向上に貢献することは難しい。何故ならば、そこでは、「力を尽くす」(『広辞苑』)や「物事が話者にとって主観的に非常に価値があることを相手に表明する様子を表し、対象となる物事が客観的に価値があるかどうかには言及しない場合」(『現代副詞用法辞典』)といった説明がなされており、たしかにこれを読めば学習者はそこに書かれている用例は理解することができるだろう。しかし、だからといっ

3) いわゆる〈ズーム・イン効果〉の認知プロセスの典型例である。

て学習者が「力を尽くす」意味を表したい場合にはいつでも「せっかく」で表現できるわけではないことは明らかである。

『広辞苑』(第五版)

せっかく【折角】一〈名〉(1)力を尽くすこと。骨を折ること。心を砕くこと。

(2)困難。難儀。(3)めったにないこと。大切。特別。

二〈副〉(1)十分気をつけて。つとめて。(2)(多く「……のに」の形で)努力や期待が酬いられなくて残念だという気持ちを表す。

『現代副詞用法辞典』

⑤泣いたりしたらせっかくの美貌がだいなしだよ。

⑥話に夢中になっていたら、せっかくの手料理がすっかりさめてしまった。

⑦せっかくの休みが父母会でつぶされた。

⑧せっかく来てもらったのに出かけてて悪かったね。

⑨人がせっかく教えてやったのに、あいつは全然聞く耳を持たないんだ。

⑩せっかく箱根へ来たんだから芦ノ湖を見て帰ろう。

⑪彼はせっかく冷房をきかせてあった部屋のドアを開けっ放しにして出ていった。

⑫「これ、私が作ったケーキなんですけど。」「まあ、せっかくですから、一ついただきますわ。」

⑬「今度の土曜日、遊びに来ないか。」「せっかくだけど、用事あるんだ。」

【解説】(略)物事が話者にとって主観的に非常に価値があることを相手に表明する様子を表し、対象となる物事が客観的に価値があるかどうかには言及しない。そこで、対象が相手に関する物事である場合(⑤⑧⑫⑬)には、配慮の暗示を伴う。自分に関する物事である場合には、その価値が生かされないと言う文脈で用いることが多く(⑦⑨⑪)、慨嘆や反省の暗示を伴う。(略)

また、英語圏の学生を対象とした日本語の教科書『AN INTEGRATED APPROACH TO INTERMEDIATE JAPANESE』(Akira Miura & Naomi Hanaoka MCGloin (1994))では、「せっかく」について次のような説明がなされ、例文が載せられている。

せっかく indicates that something has been done with a great deal of trouble, that someone has spent a great deal of time to reach a certain state.

a) 人がせっかく作ってくれた料理を食べないのは失礼だ。

(It's impolite not to eat food which someone has taken the trouble of preparing for you.)

b) せっかく習った漢字は忘れないようにしましょう。

(Please try not to forget kanji, which you have spent considerable time and energy to learn.)

「せっかく」と例文についての英文による上述の説明も、先に述べた日本語の説明同様説明自体が間違っているわけではない。しかし、これらの説明はこの文脈に表れる「せっかく」の意味を説明しているにすぎない。例文の英訳を読んだ学習者は例文の意味は理解できるだろう。しかしだからといって、その学習者が「せっかく」を使って正しい文が表出できるかどうかは問題である。現に、上述の説明だけを読んだある学習者は「せっかくお金を稼いだので、車を買うことができる。」という文を作っている。この文は明らかに英文で説明されている条件を満たしている。それにもかかわらず、日本語の文としては妥当性を欠いている。こういったことは日本語教育の現場では枚挙に暇がなく、後付の説明の危険性を露わにする顕著な現象といえよう。日本語教育のためには日本語教育に効果的な言語説明が必要とされているのである。

2 スキーマと用例説明

ここでは、「せっかく」の意味機能を、人間の認知能力を反映するスキーマとして捉え直すことにより、前項で掲げた⑤～⑬の用例にみられる種々の機能の統一的説明を図る。

(1) 「せっかく」スキーマ

母語話者であれば、多くの場合、⑭のアンダーラインの箇所には、「金閣寺を見る」「舞子さんの写真を撮る」「清水寺へ行く」「京懐石を食べる」「鞍馬まで足をのばす」などといった文を選択肢として挙げるだろう。これは、いわゆるヒューリスティクスによる問題解決の結果である。

⑭ せっかく京都へ行くのだから、_____。

人間が問題を処理する方法には、大きく、アルゴリズム⁴⁾とヒューリスティクスの2種類があるとされている。ヒューリスティクスは、個々の事例に基づく経験的知識で、絶対確実ではないものの、うまく適合すれば簡易に問題を解決することが期待できる方法をいう。春になると桜が咲く、信号が青になったら渡るなど、常に妥当なわけではないが、多くの場合にうまくいく経験則により、関連する情報が部分的に得られた場合、その全体像を推測する

4) 広く知られている一般性の高い教科書的知識で、数学の定理や物理法則のように、正しく適用される限り確実に問題解決する手続きのこと。

場合などに用いられる。われわれの日常では、そのような場合がほとんどなので、通常の行為はほとんどの場合ヒューリスティクスに基づくと考えられている。

このようなヒューリスティクスに基づいて、母語話者は④では、「せっかく京都へ行くのだから」という前件文を手掛かりに、経験則から後件文に「金閣寺を見る」「舞子さんの写真を撮る」「清水寺へ行く」「京懐石を食べる」「鞍馬まで足をのぼす」などの文を表出するのである。では、これらの後件文が表出されるということからは、話者が前件と後件の関係の成立要因として何を認識していると考えられるだろうか。両者の関係を見ると、まず、後件はすべて「京都へ行く」という事象に関与する事象であり、さらに、「京都へ行く」ことにより実現可能であり、かつ、話者がその実現可能性をプラス評価（実現を望ましいと考える）、もしくは中立評価（実現に対して何の感情も持たない、少なくとも実現を望ましいと思わないというマイナス評価はない）している事象ばかりである。したがって、このことから次のような考えが導き出される。後件に「京都へ行く」に関与する事象が選ばれているのは、前件の「京都へ行く」という事象が惹起するものであることは容易に推測される。となると、もう一つの要因である実現可能性は「せっかく」によって惹起されていると考えるのが妥当だろう。つまり、話者は、「せっかく」という表現形式により、「京都へ行く」という事象概念が含意する「金閣寺を見る」「舞子さんの写真を撮る」「清水寺へ行く」「京懐石を食べる」「鞍馬まで足をのぼす」等々の事象概念のそれぞれが実現可能であることを話者自身が認識していることを表しているのであり、後件でその実現可能事象の一つを自分の意志で特定しているのである。

この事象特定行為は、図5で示す参照点能力によって説明できる。「京都へ行く」が参照点として指示されることによって、ターゲット候補の探索領域が起動されるのであるが、その探索領域は「せっかく」が付加されていることにより、事象が実現可能領域であることがプロフィールされている。話者は参照点（R）を手掛かりとして実現可能領域の中にあるターゲット（T）を特定するのである。したがって、「せっかく」スキーマは、話者の参照点能力を示す図1と参照点とターゲットの関係を示す図2を融合させたものに、ドミニオンを「実現可能」という意味でプロフィールした、図5のように規定される。

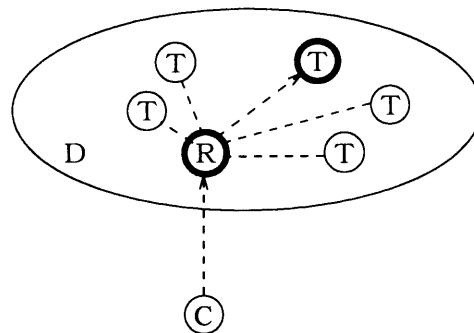


図5

(2) 用例説明

「せっかく」によって直接修飾される部分を前件、それより後の部分を後件とすると、後件には、前件から当然のこととして想定される事象がくる場合と、前件から当然のこととして想定される事象を否定する場合の二種類がある。前者を肯定的意味、後者を否定的意味として、それぞれに分けて説明する。また、⑧⑨は「のに」を含む複文構造になっており、「のに」の機能も作用して前件後件関係が成立しているため、「のに」についても言及する必要があることから次項で説明する。

〈a. 肯定的意味〉

⑩ せっかく箱根へ来たんだから芦ノ湖を見て帰ろう。

⑫ 「これ、私が作ったケーキなんですけど。」「まあ、せっかくですから、一ついただきますわ。」

⑤では、先に⑭で説明したのと全く同じ心的行為がはたらく。つまり、「せっかく」によって修飾された「箱根へ来る」という事象が参照点となり、「箱根へ来る」から想起される実現可能な事象を集合体とするドミニオンが立ち上がる。話者はいくつもの候補の中から、集合体のメンバーである「芦ノ湖を見て帰る」をターゲットとして特定する、というものである。⑫の「せっかくですから」の発話の内には、「あなたがケーキを作ってくくださった」という事象が含意されている。まず、事実関係についての認知プロセスでは、「あなたがケーキを作って、それを私にくれた」ことが参照点となって、それから想起される実現可能な事象が集合するドミニオンが立ち上がり、「あなたの作ったケーキを食べる」というターゲットが特定される。その言語化が「一ついただきますわ。」となっている。

しかし、⑫では「あなたがケーキを作って、それを私にくれた」という事象に、話者が時間と手間をかけた作業を意識すると、さらに次のような感情も付加される。店に行きさえすれば手軽に美味しいケーキが入手できる現在の状況のなかで、時間と手間をかけた作業を意識した場合、手製のケーキの価値は、たんにケーキが存在することを超え、それを作った作り手の好意が浮き彫りとされる。そんな「あなたの好意の存在」をターゲットとして特定した話者には、手間と時間をかけた作業という相手の好意を受け入れることから、相手の労をねぎらうイメージが表出する。こういった、相手の労をねぎらうといった意味は文脈が産出する意味である。先に述べた『広辞苑』「(1)力を尽くすこと。骨を折ること。心を砕くこと。」や英文の「せっかく indicates that something has been done with a great deal of trouble, that someone has spent a great deal of time to reach a certain state.」といった意味はまさにこういった文脈によって醸し出される意味である。

〈b. 否定的意味〉

上述の⑩⑫および「のに」を含む⑧⑨を除いた全ての文例はドメイン内のターゲットが否定的意味で特定されたものである。

⑦せっかくの休みが父母会でつぶされた。

ヒューリスティクスに基づき、前件と後件の関係を肯定的に解釈しようとするれば、⑦では、「せっかくの休み」を参照点として「自由な時間を持つ」という事象が実現可能ターゲットとして特定され、例えば、「せっかくの休みだからドライブに行こう。」といった言語化が考えられる。しかし、⑦ではターゲットである「自由な時間を持つ」の可能性が否定され、その言語化が「父母会でつぶされた」と表現されている。このような後件が否定的意味で表されるスキーマは図6で規定される。

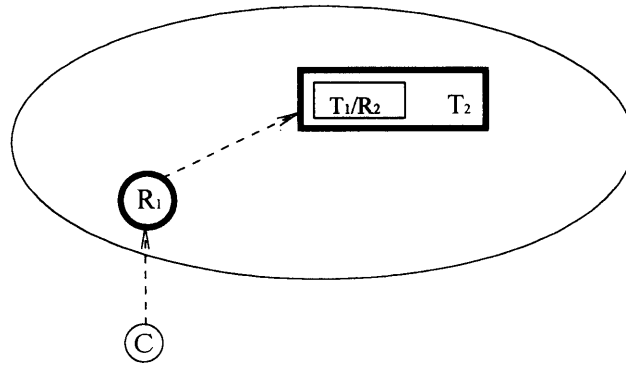


図6

図6では、まず、「せっかくの休み」が参照点 (R₁) となり、探索過程の途上のターゲット (T₁) である「自由な時間を持つ」が埋め込まれ、次いでこのターゲットを次の参照点としてその否定領域が最終的なターゲット (T₂) として特定される。否定の原因が「父母会でつぶされた」という言語化となって表出されている。図6では T₁ の否定領域である T₂ は T₁/R₂ の外にある太線の四角の中で表されている。R₁ を参照点として T₁ を特定し、その T₁ が次の参照点となり、最終的なターゲット T₂ を特定するというこの動きは、参照点能力の動性のはたらしによるものである。以下の例文においてもすべてこの参照点能力の動性をはたらしている。

⑤泣いたりしたらせっかくの美貌がだいなしだよ。

⑥話に夢中になっていたら、せっかくの手料理がすっかりさめてしまった。

⑪彼はせっかく冷房をきかせてあった部屋のドアを開けっ放しにして出ていった。

⑤の「美貌」は美貌の存在を前提とした表現であり、話者は聞き手に「あなたは美しさを備えている」ということを伝えている。状態性の高い事象であることから、ターゲットとなる実現可能事象は限定されにくいだが、ここでは「人を魅了する」事象となっている。⑤では、「泣く」という条件の設定により、「人を魅了する」事象の実現可能性の否定が特定されている。⑥では「手料理」を参照点として、「手料理が食べられる」等を内包するドメインが誘導され、探索過程の途上のターゲット事象として「温かい料理を食べる」が特定されるが、話に夢中になることにより、特定されたターゲットの実現が否定されたため、否定領域が特定され、実現の否定の状況が「すっかりさめてしまった」と言語化されている。⑩では、「冷房をきかせてあった部屋」を参照点として、話者はまず探索過程途上のターゲットとして「部屋が涼しくなっている」事象をターゲットとして特定するが、そのターゲットが実現していないことを認識し、ターゲットの否定領域を特定する。非実現のターゲットの言語化が「部屋のドアを開けっ放しにして出ていった」となっている。

⑬「今度の土曜日、遊びに来ないか。」「せっかくだけど、用事あるんだ。」

⑥の「せっかく」は⑫の場合と同じ振る舞いをしているが、後件がそれを拒絶するコメント発話となっている。⑫同様⑬の場合も、話者は相手の発話内容に「誘ってくれた」という「好意の存在」をターゲットとして認識している。しかし、何らかの理由により、その実現を受け入れることができない状況が「せっかくだけど、用事あるんだ。」という発話となっている。「誘ってくれた」という「好意の存在」をターゲットとして認識していることから、「残念だ」という気持ちが含意される。

後件が否定的意味を持つ場合は、ドミニオン内のターゲットを探索過程の途上のターゲットとし、それを否定しているため、本来予想される実現が実現されないという認知プロセスである。「せっかく」スキーマでの実現は、話者がそれを望ましいと思う実現に限られていることから、それが実現されないとすると、話者には「残念だ」「もったいない」等の感情が喚起される。しかし、こういったイメージは、文脈によって惹起される文脈効果である。「せっかく」の本質的意味機能と、その表現がコンテキストのなかに据え置かれることによって惹起される文脈効果とは区別されなければならない。

(3)「のに」スキーマ

⑮ 雨が降っているのに、_____。

⑮のアンダーラインの箇所に入る文は、ヒューリスティクスに基づいて考えると、「あの人は

傘もささずに歩いている」「子供たちはまだ公園で遊んでいる」等々の事象だろう。「のに」の意味機能の一面は、前件から当然のこととして予期される事象とは反対の意味を持った事象を特定するというものである。⑮でいえば、「雨が降っている」という事象から経験的にわれわれが予期する事象は「誰もが傘をさしている」「子供たちは公園で遊ぶのをやめた」等々という事象であるが、予期とは反対の事象を誘導する「のに」によって、一般に予期される事象に対応する「あの人は傘もささずに歩いている」「子供たちはまだ公園で遊んでいる」が特定されることとなる。このような話者の予期とは反対の事象を特定するという心的行為を表したスキーマが「のに」スキーマである。「のに」スキーマは図7で示される。

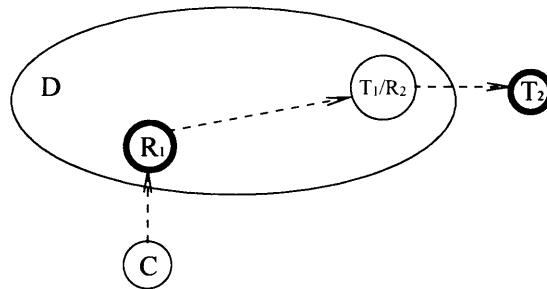


図7

図7は次の認知プロセスを示している。まず、参照点が指示されることによってターゲット候補の探索領域であるドミニオンが起動されるが、「せっかく」の場合とは異なり、「のに」ではドミニオンは「予期に反する」という意識がプロファイルされる。そのため、プロセスは複雑となり、まず参照点 (R₁) から探索過程の途上のターゲット (T₁) が埋め込まれ、このターゲットを次の参照点 (R₂) として、予期に反した事象の集合体である領域が探索領域となり、参照点とは反対の意味を持つ事象が最終的なターゲットとして特定される。図7の「のに」スキーマで⑮を説明すると次のようになる。「雨が降っている」という事象を参照点 (R₁) とし、まずはそこから当然予期される事象「誰もが傘をさしている」がターゲット (T₁) として特定され、このターゲットを次の参照点 (R₂) として、参照点とは反対の意味を持つ「あの人は傘もささずに歩いている」という最終的なターゲット (T₂) が特定されるのである。参照点能力の動性がここでもはたらいている。

(4) 「せっかく+のに」スキーマ

「せっかく+のに」の表現では、「せっかく」スキーマと「のに」スキーマが融合してはたらく。つまり、「せっかく」スキーマのはたらきで起動されるドメインは予期と実現可能性の両方でプロファイルされたものであり、ドメイン内で特定されたターゲットは、「のに」スキーマによって、次の参照点 (R₂) としてはたらく、最終的には参照点と反対の意味を持つ

ターゲット (T₂) が特定されるというものである。このような「のに」スキーマにおける認知プロセスと、「のに」が付加されず後件が前件を否定的意味で指示する場合の認知プロセスは、参照点能力の動性という点では共通であるが、最終的にプロファイルされる事象のドメインが、前者は予期に反するという意味でプロファイルされているものであり、後者は参照点事象の否定領域にあるという点で異なる。

(5) 用例説明

⑧ せっかく来てもらったのに出かけてて悪かったね。

⑨ 人がせっかく教えてやったのに、あいつは全然聞く耳を持たないんだ。

⑧では、「せっかく来てもらう」を参照点 (R₁) として、当然予期され、かつ実現可能なターゲット (T₁) が探索領域から選ばれる。例えば、「あなたに会える」などの事象である。そして、「のに」スキーマによって、そのターゲットが次の参照点 (R₂) となり、「せっかくの」のドミニオンの外であると同時に「のに」のドミニオンにある事象「会えなかった」を最終ターゲット (T₂) として特定する。最終ターゲットが相手に向かうコメントである「出かけてて悪かったね」となって言語化されている。⑨でも同様の心的行為が反映されている。「せっかく教えてやる」を参照点として、予期、かつ実現可能なターゲットとして「忠告を聞く」が選ばれるが、「のに」スキーマにより、「せっかくの」のドミニオンの外であると同時に「のに」のドミニオンにある、「忠告を聞く」の反対の意味を持つ事象「あいつは全然聞く耳を持たないんだ」が最終ターゲットとして特定される。

3 結論

言葉の意味機能を、人間の認知能力を反映するスキーマとして捉えるという新しい研究方法で、「せっかく」の意味機能を考察した結果、以下のことがいえる。言語表現「せっかく」を表出する基本スキーマは、「せっかく」によって修飾される事象が特定されると、話者は自己の、記憶や経験に基づき、その事象を根拠にして、自分にとって望ましいと思われる事象、もしくは何の感情移入もない事象で、実現可能性が想定される事象を特定するというものである。これを一般的な認知能力である参照点能力の観点から説明すると次のようになる。「せっかく」によって修飾される事象が参照点として指示されることによって、ターゲット候補の探索領域が起動される。その探索領域は、話者が実現を望ましいと思う事象がメンバーとなった集合体である。話者は参照点を手がかりに、ヒューリスティクスに基づき、探索領域にあるターゲットを探し当てて特定する。「せっかく」の意味機能はこの認知プロセスを反映するものである。

「せっかく」の後件が前件を肯定する際には、上述の基本スキーマがそのまま稼働する。一方、後件が前件を否定する際には、基本スキーマにさらにもう一過程、次のような認知プロセスが反映される。それは、基本スキーマでの最終ターゲットが次の参照点となり、基本スキーマでの最終ターゲットの否定領域を特定するというものである。参照点とターゲットの関係は固定されたものではなく、動性を特徴とすることから、このような参照点とターゲットの連動が可能となる。実際に「せっかく」という表現が使用される場合は、これらのスキーマが単独にはたらく場合もあれば、本節では「のに」のケースを採り上げて説明したが、「のに」だけでなく、他の様々なスキーマと融合してはたらく場合もある。

したがって、「せっかく」が導く文は、スキーマのバリエーションによって、また他のスキーマとの融合によって、さらには、スキーマが据え置かれる文脈によって実に様々なイメージを醸し出す。従来、「せっかく」の用法として説明されている種々の意味機能は、こういった多様な要因を全て取り込んだ説明であることが多い。それ故に、ある文についての説明は、その文については適切な説明であるのだが、だからといって、その説明が他の文をも説明することにはならないのである。「せっかく」の備える本来の意味機能と多様な要因がもたらす意味とが混同されてしまっているのである。

文脈に即した説明をし、そのレベルの説明で止めてしまえば、学習者はそこに掲載されている文は理解できても運用能力までつけることはできない。表現を教える場合、その表現を理解表現として理解出されれば良いとするか、運用表現として実際に使えるようになることを目的とするかで、教え方は当然異なる。運用レベルを要求するのであれば、その表現の産出メカニズムを探求し、そのメカニズムを理解させる必要がある。もちろん、それが即ち、上述してきたようなスキーマをそのまま教えることでないことは当然である。スキーマ自体は言語表現それ自体とは区別されるものであり、言語表現はスキーマに動機づけられているにすぎない。こういった認知プロセスを踏まえ、いかに動的な思考へと学習者を導く指導法を考えるかが、今後の、しかも早急に取り組まれるべき日本語教育の課題である。

IV むすびにかえて

言葉を自立的な知識として、記述・説明の対象としているかぎり、言語教育に貢献する言語研究はすすまないだろう。従来の研究パラダイムを一転させ、言葉の背後に存在する主体の認知メカニズムと運用のメカニズムが解明されれば、これまでの文法重視、規則重視の教授法を越え、運用能力をつけるのに効果的な科学的で体系的な言語教育のアプローチが可能となることは間違いない。言語現象をたんなる記号の組み合わせに基づく抽象的な記号体系として分析するのではなく、言語主体の認知能力や運用能力との関連でダイナミックに探求していくという視点を持つことこそが、今後の日本語教育のための日本語分析に必要とされ

る姿勢である。

例文出典

村上春樹 1999年『スプートニクスの恋人』講談社。

参考文献

- 時枝誠記 1950年『日本文法口語篇』岩波書店。
仁田義雄 2002年『副詞的表現の諸相』くろしお出版。
前田直子 2002年「複文の種類と日本語教育」『日本語学と言語教育』東京大学出版会。
森本順子 1994年『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版。
山田孝雄 1908年『日本文法論』宝文館出版。
山梨正明 1995年『認知文法論』ひつじ書房。
_____ 2000年『認知言語学原理』くろしお出版。
渡辺実 1983年『副用語の研究』明治書院。
Brisard, Frank. 2002. *Grounding: the epistemic footing of deixis and reference*. Mouton de Gruyter.
Fauconnier Gilles. 1998. "Mental Spaces, Language Modalities, and Conceptual Integration". *The New Psychology of Language*. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar I*. Stanford University Press.
_____. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar II*. Stanford University Press.
_____. 1993. "Reference-point Constructions," *Cognitive Linguistics*, No. 4. No.1, pp. 1-38.
_____. 2000. *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.
Nuyts, Jan. 2000. *Epistemic Modality, Language, and Conceptualization*. John Benjamins.
Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics. Vol. 2*. Massachusetts Institute of Technology.